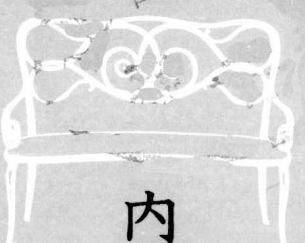
「萩原朔太郎」の亡霊

内田康夫

人気なき公園の椅子にもたれて
われの思ふことはけふもまた烈しきなり。
いかなれば故郷のひとのわれに辛く
かなしきすももの核を嚙まむとするぞ。
遠き越後の山に雪の光りて
麦もまたひとの怒りにふるへをののくか。
われを嘲けりわらふ声は野山にみち
苦しみの叫びは心臓を破裂せり。
かくばかり
つれなきものへの執着をされ。
ああ生れたる故郷の土を蹈み去れよ。
われは指にするどく研げるナイフをもち
葉桜のころ
さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

徳間書店

「萩原朔太郎」の亡霊



内田康夫

徳間書店

「萩原朔太郎」の亡霊

第一刷／一九九三年九月三〇日

著者　内田康夫　発行者　徳間康快　発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四―一〇　郵便番号一〇五―五五　電話〇三―三四三三―六二三一　振替東京四―四四三九二

印刷所　本文・㈱清菱印刷　カバー・真生印刷㈱　製本所　大口製本印刷㈱

定価は帯・カバーに表示してあります。落丁・乱丁はお取替えいたします。

© Yasuo Uchida 1993. Printed in Japan

〈編集担当　磯谷　励〉

目次

プロローグ 3
オブジェ殺人事件 11
旧友 34
望郷 81
天上縊死(いし) 112
追跡 153
接触 174
偽装工作 216
地獄の構図 238
着想の崩芽(ほうが) 278
エピローグ 309
小説作法の開眼 312

装幀・田淵裕一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

プロローグ

夏へと向かう季節の足を引き止めるように、前線が北から下りてきて、そこへ吹き込んだ南風が上空で雲の層を作った。日没を過ぎると、待ったなしで闇夜になった。

遊佐家は二つの集落のちょうど真ん中あたりにポツンと建つ一軒家である。一方の集落には村役場と公民館、もう一方の集落には中学校と駐在所があり、そういう公的機関を中心に、それぞれの集落にはいくばくかの商店と民家が、寄り添うように集まっている。遊佐家の前を通る村道は、どちらの集落からも等距離を保っていて、日中はK村の中の道路としては通行量の多い区間だ。

日が昏れると通行が途絶える。街灯などもなく、遊佐家の窓から洩れる灯火だけが、闇の中の道標であった。

三人の中学生が遊佐家へ向かっていた。歩き慣れた道だが、今夜の闇の濃さは特別で、砂利道にしばしば足を取られそうになった。生温い風が通り過ぎたかと思うと、雨もよいを感じさせるような湿った、うそ寒い空気が降りてくる。大気の不安定な状態が、そのまま人間の心にしのび

入るような、不安に満ちた晩だ。
連れ立って歩きはじめた頃は軽口も飛び出していたのに、いつのまにか三人とも黙りこくって、足の運びにだけ全神経を集中させていた。
「あれっ、どうしたんかなァ?……」
義則がとつぜん言ったのにつられ、他の二人も立ち止まり、前方を見た。
遊佐家までまだ五〇メートル以上あるだろうか。玄関ドアが開いて、女が飛び出してきた。背後から屋内の明かりが射して、闇の中に女の姿を浮かびあがらせた。女は止まらず、振り返りもせず、三人と反対側の方向へと走り去って行った。
「また喧嘩かや」
義則が「しょうがねえな」と言わんばかりに呟いた。同級で生まれ月も大差ないのに、三人の内ではとび抜けて大人びたところのある少年だ。
「具合わるいなあ、どうするか」
仲間を見返った。闇の中にぼんやり、白い顔がある。
「先生ッとこの夫婦喧嘩はめずらしくないよ、かまわないから、行こ行こ」
俊雄は例によって楽観的だ。
「だけどよ、また邪魔にされるんじゃ、たまらんぜ」
「奥さんがいなくなったんだもの、邪魔にされること、ないだろ」

「しかし、やっぱり気まずいぞ。先生だって機嫌が悪いだろうしな」
「そんなことあるもんか、奥さんいない方が先生はいいらしいよ。勢津子さんがくる時なんか、とくにそうだ」
〝勢津子〟というのは遊佐が主宰する「萩原朔太郎研究サークル」の一員で、前橋の女子高へ通っている美少女だ。三人の先輩にあたるわけだが、一種のマドンナ的存在でもあった。もっとも勢津子の方は中学生の頃から遊佐教師に憬れていて、二人の関係はすでに教師と教え子の領域を越えているというのが、もっぱらの噂だった。
「勢津子さんが問題だと、おれは思う」
義則はまた分別くさく、言う。「奥さんが憎いのは研究サークルじゃなくて、勢津子さんひとりなんじゃないかな、おれたちはそのトバッチリを食っているんだ」
「そうじゃないよ、奥さんはサークル全体が嫌いなんだ。おれ、聴いたことがある、奥さんが先生に向かって、朔太郎のわる口言ってるの。『あんな、愚痴ばかり言ってる詩のどこがいいのか、気が知れない』っていうんだな。奥さんにしてみれば、のけ者にされているっていう気がするんじゃないかな。勢津子さんのことも含めて、先生とのあいだがうまくいかないのは、みんな研究サークルのせいだと思い込んでるんだよ」
「どうする、行くの、帰るの？」
無口な茂が、水をさすように、モソッと言った。

「とにかく行こうよ、約束したんだもの、黙って帰ったら悪いよ」
俊雄の主張に義則も随い、三人はふたたび遊佐家へ向けて歩きだした。左右の畑から麦の匂いが湧き上がって、鼻孔をくすぐる。こんな場所に〝官舎〟を建てたのは、村の有力者同志のサヤ当ての産物だという。自分の住む集落に建てようと、互いに譲らず、結局、中間点を選ぶことになった。遊佐夫婦はそこの二代目の住人として、四年前に前橋から越してきた。校長と教頭、それに二人の教諭が師範学校出身、残りはすべて旧制中学か新制高校卒業のいわゆる〝代用教員〟というK村立中学校の教諭陣に、東京の大学を卒業した遊佐が加わったのは、まさに画期的ともいえる出来事だった。村では共働きを希望する遊佐夫人のために、役場に空席をひとつ作るという歓迎ぶりを見せた。
遊佐吾郎は病弱を理由に学徒出陣をのがれたというだけあって、青白く陰翳の濃い顔立ちをしていた。
遊佐は戦後まもなく、当時看護婦だった村上春子と結婚し、しばらく前橋市内にある春子の実家に同居していた。村上家では一人息子を戦争で亡くしていたから、遊佐に養子になってもらいたかったようだったが、遊佐にその気はなく、K村から中学校教諭の口がかかると、さっさと移って行った。
K村にとって、遊佐の〝導入〟は単に中学校の教諭を招んだ、というだけでなく、おおげさに言えば、新しい知識や文化の波を期待するというほどの意義があった。そして、ある程度その期

待は叶えられたと言っていい。

遊佐は萩原朔太郎に傾倒し、自分も詩を書いた。その影響はすぐに現われ、生徒はもちろん、卒業生を中心に村の若者たちのあいだにも詩の愛好者が増えて、自然発生的に、遊佐を囲む研究会のようなものができた。遊佐はそれに「萩原朔太郎研究サークル」と命名し、学校や公民館、それに自宅で熱心に研究会を開いたり、詩作指導を行なった。

「朔太郎」を語る時の遊佐は青白い顔を紅潮させ、大きな眸をキラキラさせながら、やむことを知らない熱弁をふるった。若い会員たちは遊佐の言葉に酔い、表情の演技に心を奪われた。彼等にとって、遊佐はすでに一種のカリスマ的存在であった。

もっとも、大人たちの中にはこういう傾向に危惧を抱く者もいないわけではなかった。萩原朔太郎は公式的には群馬県が生んだ偉大な詩人だが、見様によっては、郷土を捨てた異端者なのだ。彼の詩のいたるところに現われる、郷里に対する痛恨の想いは、純粋で保守的な郷党人にとっては不快そのものだ。若い連中がそういうものに毒され、批判精神ばかりが植えつけられるようでは困るのだ。とはいえ、遊佐には思想的な背景などまるでなく、それこそ純粋に詩の世界に没頭しきっていることも分かっていたから、研究サークルに表面立ってケチをつけようとする者はいない。もしいるとすれば、当の遊佐の妻・春子ということになろう。

春子がとび出して行ったあと、遊佐家はひっそりと静まり返って、オレンジがかった淡い灯りが濃密な闇に滲み出ていた。

開け放しのドアを入って三和土(たたき)の上に立った三人は、すぐに異様な気配を嗅(か)ぎ当てた。ちっぽけな式台の向こうの障子も開いていて、その先に右奥の部屋から足首だけ突き出したのが見えている。どうやら仰向けに大の字に寝ているらしいのだが、その生白い色にはいかにも生気がなかった。

「先生、今晩は」

義則が遠慮がちに声をかけた。

〝足〟は動かない。眠っているのかな、と三人は顔を見合わせた。

「今晩は」「今晩は」

義則と俊雄がほとんど同時に呼びかけた。ふつうの眠りなら気付かないはずはない。泥酔しているにしても、身動きひとつしないというのはおかしい。それに、遊佐先生が酒飲みだという話は、聴いたことがなかった。

「なんだか、変じゃないか?」

義則の声が震えた。

「上がってみよう」

俊雄は靴を脱ぎ、お邪魔しますと声をかけて部屋へ入った。襖(ふすま)の奥を窺(のぞ)き込んだとたん、「あっ」と言ったきり、動かなくなった。

「どうした」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

残る二人も駆けるようにして、俊雄の傍に寄り添った。
奥の部屋に大の字なりに倒れた遊佐吾郎の右胸に、出刃包丁が突き立っていた。いつも教壇にいる時と同じワイシャツ姿のままで、出刃包丁を中心に白い布地が日の丸状に赤く染まっていたが、それほどひどい出血とは思えなかった。
「死んでるのかな……」
三人はおたがいの腕を無意識に握りしめながら、顔を見合わせた。さりとて〝死体〟に近寄って確かめる勇気はない。
「奥さんがやったんだ」
「駐在に知らせなくちゃ」
玄関へ向かおうとした時、そこから春子がとび込んできた。一瞬、血走った眼で三人を睨んだ。肩で息をしながら「何かあったの?」と叫ぶように言った。
三人はとまどった。
(何を言ってるんだ、自分でやったくせに)
そう思いながら、言葉にならない。春子のすさまじい気迫に圧倒された。
春子は三人の脇をすり抜け、すぐに遊佐の状態を発見して息を呑んでみせた。
「あなた、どうしたの!」
喚きながら遊佐にすがりつき、出刃包丁を引き抜いた。そこから温かそうな血がトクッとあふ

れるのが見えた。
春子はキッと振り向き、包丁を持った手を三人の中学生に突きつけ、
「誰がやったのよォ！」
金切り声で叫んだ。
三人はわあっとばかりに遁げた。履きそこねた靴を拾って、はだしのまま外へとび出した。砂利道が足の裏を邪険に刺したが、それが苦にならないほど脅えていた。
闇の中を、役場の方角から灯火が近づいてくるのが見えた。どうやら自転車らしい。
「おまえら、そこで何をしてるんだ？」
声の主は駐在の木暮巡査だった。三人は救われた想いで、木暮に駆け寄った。
遊佐先生が、刺されて、殺されて、奥さんが、右の胸を、血が流れて、死んでいる……。断片的な言葉が脈絡なく告げられた。正確な意味を把握するまでには至らなかったが、ともかく、容易ならぬ事態が発生したことだけは、木暮巡査にも判った。
木暮は自転車を道路脇に倒すと、警棒を握りしめ、慎重に身構えながら玄関を入って行った。

オブジェ殺人事件

1

気分のいい朝であった。十一月に入ってからずっと異常低温だとかで、寒い日が続いていたのが、昨日吹いた南風のせいか、その風が熄むと、嘘のような小春日和になった。

須貝国男は門を出ると、薄靄の余韻が棚引く空を仰いで大きく伸びをしてから、公園へ向かう舗道を歩いて行った。

この辺りは都心に職場を持つ勤め人の多い街だから、ふだんだとずいぶん人通りがあって、公園へ辿り着くまではただ気忙しいだけだが、日曜の朝はまれにジョギングをする姿がちらほら見える程度ののどかな雰囲気だ。

それにしても、かつては片田舎のようなところだったこの町も賑やかになったものである。新宿から私鉄で四十分というのは、いまや理想的なベッドタウンだという。洒落た洋館風の建売住

宅やマンションが次から次に建ち、人口はかつての十倍ほどにふくれあがって、町はたちまち市に昇格した。それでも、市の為政者がよほどしっかりしていたものとみえ、ところどころに立つケヤキやブナ、コナラなどの木木が今もなお武蔵野の面影を偲ばせるのである。そして、これから須貝が行こうとしている市立公園はなかなかのものと言っていい。湧水池を中心に土地をたっぷり使っている上に、自然林をなるべく生かすような設計思想だったことが、周辺の街並にさえ影響を与えるほど情感の豊かな空間を現出させることになった。

須貝国男の日課はまずこの公園の散策から始まる。公園内にはいくつかの散歩道があり、当然のことながら、池の畔りに沿って歩くコースに最も人気がある。須貝はしかし、その人気を嫌って、林間のコースをのんびりと歩くことにしている。途中、いつもきまって腰を下ろすベンチがある。その周辺だけ、木立が疎らで、遠くまで見通せる場所だ。そのせいか、アベックからも敬遠されるらしく、ことに朝はまず〝客〟の姿はない。

だが、今朝にかぎって、ベンチに人影があった。かなり手前でそれに気付いて、須貝は失望した。べつに自分の指定席というわけではないが、なんとなく既得権を侵害されたような不満を感じた。

（早く立ち去ってくれないかな――）

そんな勝手な願望を思い浮かべた時、ベンチの上の人物がこっちを見た。いや、須貝には見たように思えたのだが、それは自分の願望を見透かされはしまいかと危惧したためであって、実際

にその人物が須貝を直視したかどうかは判らなかった。そこまで、まだ一〇〇メートルほどの距離があったし、それにその人物は黒いサングラスをかけていたのだ。黒いトックリセーターに黒ズボン、頭にはテニス帽を深ぶかとかぶっている。

（男だな――）と判別したとたん、その男はベンチを立って、向こうへ歩き出した。少し猫背で小太りだが、脚は結構長く、大股に歩く。須貝の歩速よりはるかに速くて、須貝がベンチに着く頃には木立の陰に見えなくなっていた。

ベンチの上に一冊の本が載っている。どうやらあの男が忘れて行ったらしい。本を取り上げ、男の後を追おうかと思ったが、すでに男との距離がかなり離れてしまったことを考えて、須貝はそのままベンチに座り込んだ。

本は『萩原朔太郎詩集』であった。朔太郎は群馬県の出身で須貝とは同郷だが、それとは別の意味で、須貝は朔太郎という名にひとつの感慨を呼び覚まされる。それはすでに三十年を超える過去の話だが、掌の中にある詩集の冷たい重量感ほどには、須貝の心の裡にこだわりの尾を引きつづけているのだ。

須貝は膝の上で詩集を開いてみた。後半の四分の一ほどのところに皮製の栞が挿んであり、必然的にそのページが開いた。

「公園の椅子」というタイトルがあった。

須貝は妙な気がした。公園の椅子の上に「公園の椅子」――という取り合わせは単なる偶然な

のだろうか。そう思った時、須貝は本能的な直感で、先刻の男がこの詩集を忘れて行ったことさえも作為めいていると思った。そういう勘のはたらかせ方は一種の職業病のようなもので、刑事稼業から足を洗ってずいぶん経つ現在もなお、須貝からは抜け切っていない。我ながらいやな性分だと思い、なるべく鈍感に、鈍感に、と心掛けながら、反射的に詮索癖が動き出すのはやむをえないことなのかもしれない。それに、存外そうした直感が的を射ていることも多いのだ。かつて「カミソリ」の異名を取った鋭い直感力がまだまだ衰えていないことに、須貝はひそかな満足を覚えることだってないわけではなかった。

須貝は「公園の椅子」の詩を黙読した。ほんの手すさび程度に俳句を創ることはあっても、詩作にはまるで縁のない男だが、こと朔太郎に関しては話はべつだ。須貝の人生に大きな転機をもたらした〝あの事件〟は、もしかすると萩原朔太郎が存在しなければ起こらなかったかもしれないのだ。

そういう感慨をこめてその詩を読み了えたとき、須貝はなんとも形容しようのない不吉な気分になった。晩秋の澄明な大気にスモッグが流れ込んできたような不快な予感であった。

公園の椅子

人気なき公園の椅子にもたれて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com